

4 野 菜

(1) 活動の重点指導事項

- ア 園芸主産地の再編強化（トマト、加賀丸いも）
- イ 園芸主産地の生産力向上
（ブロッコリー、かぼちゃ、にんじん、だいこん、千石豆、ねぎ）
- ウ 新規栽培者育成による産地拡大（なす、たまねぎ、加工用トマト）
- エ 新規産直農家の育成（道の駅じのもんや、能美の市）

(2) 活動の経過と実績

ア 園芸主産地の再編強化

(ア) トマト

- a 春トマトは好天が多くほぼ昨年並みの単収（11.6t/10a）となったが、出荷ピークが平年より遅れて7月上中旬となった。7月は全国的に安値となったことから販売価格が低迷し、最終的な売上金額は前年の13%減となった。

夏秋トマトでは、8月の極端な日照不足により9月の出荷量が伸びなかった。10月には出荷量が回復したが、11月には早期に気温が低下したことから着色が遅れ気味となった。最終的な単収は不作であった前年をやや上回った（6.9t/10a）。

- b 春トマト、夏秋トマトともに継続して新品種の試作・検討を行った。春トマトでは肥大性の良い「TY 桃太郎ホープ」、やや小玉傾向だがチャック果や裂果の少ない「麗月（SC2-436）」が比較的有望と思われたことから、継続して試験を行うこととなった。夏秋トマトでは主力品種の「りんか409」「CF 桃太郎はるか」を越える品種は見られなかった。

- c 施設園芸部会青年部では、昨年引き続きコマツとの連携活動として、ICT技術を活用したトマト栽培環境の改善に取り組み、細霧冷房の効果検討などを行うとともに、トマトの収量予測への活用に向けた検討を開始した。

また、小松市の支援を受けて収穫体験イベントの開催や販促活動の実施に取り組み、小松とまとのPRに努めた。

- d 昨年からINATO、コマツ、農林総合研究センターの支援を受け、JA小松市の試験用ハウスで実施している地下水冷風装置を用いた夏越し長期穫り栽培の試験は、今年度は革新的技術開発・緊急展開事業（うち地域戦略プロジェクト）「自然エネルギー活用型施設園芸によるトマトの収益性向上の実証研究」の現地実証ほとして検討を行った。これと併せて小松市内の農家ほ場に夏越し長期穫り栽培2か所、夏秋穫り2か所現地実証ほを設置し、地下水冷風装置の効果確認や機能向上に向けた検討を行った。



地下水冷風試験実証試験
現地検討会

その結果、地下水冷風装置の性能向上や冷却効果の効率化を図ることができたが、各試験ハウスの収量は目標に到達しなかった。

次年度は装置の機能向上や、冷却効果がより出やすくなるよう装置の稼働期間を見直すことにより、目標単収の達成を目指す。

(イ) 加賀丸いも

- a 昨年より1週間遅れの6月上旬から出芽し、害虫被害は少なく初期生育は良好だった。5～6月の降水量は少なく初期生育は低温気味だったが、6月、7月は日照時間が多く、茎葉は順調に繁茂した。8月のいも肥大期に入ると、台風等の大雨が増えたが、昨年程の過度な雨量はなく、適度な肥大で収穫期を迎えられた。
- b 省力化技術の導入に向け、高畝形成機による畝立てとマルチ栽培による生産性向上試験、また基肥一発肥料による品質向上試験を行った。



丸いも料理フェアオープン
イベント（ホテル日航金沢）

- c 平成29年2月に策定した産地戦略に基づき、JA根上、JA能美、JA小松市の加賀丸いも生産者、関係者で組織する南加賀地区丸いも生産協議会では、ブランド力強化・付加価値向上に向けて統一出荷箱の作成やのぼり旗など販促グッズを作成した。

さらに新たに最上級品質を「プレミアム商品」として設定し初競りでのPR、ホテル日航金沢で丸いも料理フェアを開催するなど地理的表示保護制度（GI）の登録を活用し内外にPR、情報発信した。

イ 園芸主産地の生産力の向上

（ブロッコリー、かぼちゃ、にんじん、だいこん、千石豆、ねぎ）

(ア) ブロッコリー

- a 春作では、軟腐病の予防防除の徹底により被害は少なく、単収は目標を達成した。秋作では、台風の影響により、軟腐病と花蕾腐敗病が多発し、10月中旬から下旬にかけて出荷減、併せて、11月の急激な気温低下に伴い、出荷数量・販売高も減少した。
- b 主食用米水稲と越冬ブロッコリーの2毛作ローテーションによる所得増大化に向け、越冬ブロッコリーでの品種選定調査の試験を実施している。

(イ) 加賀かぼちゃ

- a 春かぼちゃについては、着果時期の低温により、着果不良に陥ったため、出荷量や販売額が減少した。
- b イオンのPB（グリーンアイ）向けにグローバルGAP相当の管理や記録を実施して取り組み、通常の市場価格より有利な高単価で販売している。
- c 抑制作についても作付推進を実施したが、前年の台風の影響による強風被害で、作付面積が減少した。このため、今年より萌芽直播に取り組んだ結果、台風の強風被害もなく収穫・出荷することができた。

(ウ) 能美かぼちゃ

- a トンネル早熟栽培では、基幹品種である「味平」の改良品種「味平DX」を試験的に導入した。草勢強く、玉肥大は良好だったが、草勢のコントロールに関しては課題を残す形となった。すでに「味平DX」を導入している加賀市の生産者を訪れ、栽培方法について参考とすべく、意見交換を行った。
- b 麦あとかぼちゃ（抑制作）は、今年の試験結果を踏まえ、今年から本格栽培し新規に10戸が取り組んだ。着果期の干ばつ、肥料不足やウイルス病が原因となり、全体的に小玉傾向で予定出荷量を下回ったが、9～10月の連続した降雨で他産地からの出荷も少なく、全体的に単価高となった。

(エ) 小松かぼちゃ

- a 「えびす」から「味平」に品種を切り換えてから5年が経過し、生産者間に栽培管理方法が定着しつつある。引き続きほ場巡回等を通じて、基本的な栽培管理方法について指導した。技術力の向上および新規栽培者の増加に伴い面積・出荷量ともに増加した。
- b 高温乾燥、雌花開花時期の降雨により着果率が低下し、また疫病の発生等により、出荷量の減少・商品率の低下がみられた。

(オ) にんじん

- a 市場が求める赤芯系品種「アロマレッド」が部会の推奨品種であり、作付け割合は昨年の86%から95%に増加し、ほぼ品種が統一された。
- b 8月の播種期は高温であったが、例年に比べると発芽しやすい環境であり、発芽の揃いも良好であった。9月は台風の影響も



掘り取り機による収穫

あったものの、生育は良好で10月中旬で平年に比べ3日早かった。その後、10月の日照不足と台風の葉傷みにより、根部の肥大はやや抑制された。市場情勢は全国的に豊作傾向であり、12月からは安価が予想されることから、昨年より3日早い11月1日から出荷を開始した。期間を通してM～L規格が中心であったが、肥大期の悪天候からSの割合も昨年より増加した。

- c 品種比較試験では、同じ赤芯系であるカネコ種苗の「紅粋」が、生育良好で肥大も比較的優れていたが、「アロマレッド」は尻づまりも良く品質が安定していたため、現時点では「アロマレッド」が優良品種であると評価し、慣行品種として継続することになった。

(カ) だいこん

a 春だいこん

強風被害もなく、生育は順調に進んだが、一部亀裂褐変症が発生した。5月以降、根部の肥大は良好で、昨年よりも3L規格が多く、一部取り遅れがみられた。品種比較試験では、「YR春の星」(吉田種苗)は肥大性・品質ともに基幹品種「役者小粋」(日本アグリ)と同等で、抽苔も観察されなかったため、有望品種として来年度も引き続き試験を行う。

b 秋冬だいこん

10月上旬頃までは好天により生育も順調に推移したが、10月中旬以降低温により肥大は鈍り、台風21号の通過、霰により茎葉損傷、抽根部の損傷により11月以降の出荷は例年の3割減となった。品種比較試験では、「冬岬」が壤土において品質・肥大が良好であり、砂質土においても品質が良好だったことから、来年度も引き続き検討を行う。



だいこん品種比較圃場

(キ) 源助だいこん

- a 昨年に引き続き1粒栽培が定着し、間引き菜体験イベント分を除く全てで1粒播種が実施された。
- b 9月の日照時間が十分あり、水分や、温度が生育にとって適度であったため肥大は順調であったが、施肥量が昨年の1割増しだったことから過剰肥大傾向

になり裂根が多発した。10月中旬の台風以降肥大は鈍化した。石川源助で先端部の縦割れ、打木源助で肩割れが多く見られた。

(ク) 千石豆

4月の低温により出荷は昨年よりも5日程遅くなった。選別の労力を軽減するため、出荷規格を試験的にプレミアム、秀、外、〇外とした。これにより生産者による選別作業は軽減されたが、プレミアムの規格については秀品との差をつける為、莢の幅等、基準をより詳細に設定し、差別化を図る必要がある。

また、地元量販店や東京の石川アンテナショップにて試食販売会を実施し、千石豆の消費拡大にむけた活動にも継続して取り組んでいる。

(ケ) 小松ねぎ

5月から6月にかけての乾燥で、生育のバラツキ・遅延がみられた。病害虫については例年よりもハモグリバエの発生が多く、7月以降は白絹病が多発した。台風21号の強風により倒伏し、出荷量が半減した。全国的な野菜類の高騰により、販売金額はほぼ昨年並となった。

(コ) 加賀ねぎ

a 播種からは順調に生育が進んだが、10月の台風による倒伏や11月からの低温により出荷量が減少した。一方、販売単価が好調だったため、販売額の落ち込みは少なかった。

b 市場からの要望もあり、部会としては秋冬出荷のみならず、夏秋出荷に向けた取り組みも開始している。

エ 新規栽培者育成による産地拡大

(ア) 川北なす

6月上中旬の低温により果実肥大が遅れたが、7月～9月の出荷は順調に進んだ。一部連作圃場では青枯病が発生し、大幅な減収となった。また10月の台風の強風により暴風ネットの倒伏等がられたが、出荷終盤だったため、最終的な出荷量は昨年より1割増となった。

(イ) たまねぎ

J A能美管内で新たな園芸品目としてたまねぎ栽培に取り組んでいる。平成28年11月に約80aに作付されたたまねぎは随時ほ場巡回を行い追肥、除草などの作業を指導した結果、5月の少雨による肥大不足が懸念されたものの、おおむね目標収量に近い約23tが収穫された。

平成29年作は生産者が15戸、栽培面積約3haとなった。育苗時に試験的に固形肥料による追肥を行ったところ、慣行区よりも生育が確保されたため、来年度以降は固形肥料による追肥体系を導入する。2月の大雪により例年よりも追肥、除草剤散布が遅れたが、雪の下ではたまねぎの生育が確認されており、今後の生育および管理について注視していく必要がある。



たまねぎ収穫機の実演会

(ウ) 加工用トマト

J A小松市管内で新たな転作品目として、コーミ(株)との価格契約取引による加工用トマトの露地栽培を開始した。石川では栽培事例がほとんどなかったことから、コーミ(株)が契約している東海地方や東北地方の栽培暦を参考

に7月上旬～8月下旬の収穫を目指して4月中下旬に定植を行った。

その結果、1段目の果実は予想より半月ほど早く着色し、また、収穫初期には5～6月の乾燥の影響による尻腐れ果や、オオタバコガの被害も発生した。

また、7月上中旬の高温の影響で収穫開始後に急激に草勢が低下し短期間で収穫を打ち切った生産者や、栽培面積が過大で労力が足らず収穫しきれなかった生産者もみられた。

その結果、全生産者の平均単収は目標の半分の2.2t/10aに留まったが、目標を上回る6t/10aとなった生産者も見られたことから、次年度は栽培規模の適正化、定植時期の見直し、病虫害の防除とカルシウム液肥の散布の徹底などを実施し、目標単収の確保を目指す。



加工用トマトほ場

オ 産直農家の育成

直売所への出荷を指向する若手農家などに対し、品種の選定や病虫害防除対策などの情報提供を行った。

管内の主要野菜の生産販売状況

品目	産地名	栽培面積 (ha)	農家数 (戸)	販売量 (t・千本)	販売金額 (千円)
トマト (春)	小松	7.3	43	861.0	223,227
	(夏秋) 小松	7.1	50	458.5	170,132
ブロッコリー	加賀	108.7	46	526.6	262,213
加賀丸いも (H28年産)	J A小松市	2.5	11	20.0	12,500
	J A能美	3.8	14	53.0	32,402
	J A根上	5.2	19	61.4	49,659
加賀しろねぎ	小松	7.0	23	91.5	24,328
	能美	0.2	2	0.6	346
	加賀	2.8	14	24.8	10,410
かぼちゃ	加賀	47.9	82	260.0	53,456
	能美	6.9	23	16.8	3,403
	小松	2.4	13	15.6	2,916
きゅうり (春)	小松	0.2	3	12.9	3,370
	(抑制) 小松	0.4	6	41.0	15,826
だいこん (春)	小松	0.9	5	54.0	4,661
	(秋冬) 小松	1.7	5	57.1	6,502
千石豆	小松	0.6	9	14.9	12,313
にんじん	小松	12.0	14	160.9	20,996
すいか	加賀	3.6	3	50.0	6,653
いちご	小松	0.06	3	1.0	1,094
なす	川北	0.5	9	23.0	5,141
源助だいこん	小松	1.6	1組織	54.6	5,411
日向源助だいこん	小松	1.5	5	25.8	3,530
自然薯	加賀	0.2	7	0.5	1,346
たまねぎ	能美	0.8	7	19.7	1,264
加工用トマト	小松	2.5	32	56.1	2,863

※平成30年3月現在 (南加賀農林総合事務所調べ)

管内のJ A直売所の産直販売額

直売所名	オープン	産直販売額(千円)	期間
あぐり (J A小松市)	H14	405,285	H29.1~H29.12
いきいき市 (J A根上)	H17	19,862	H29.1~H29.12
元気村 (J A加賀)	H21	267,442	H29.4~H30.2
じのもんや (J A小松市)	H22	271,666	H29.1~H29.12
能美の市 (J A能美)	H23	231,220	H29.1~H29.12
えちゃけな (J A小松市)	H29	3,113	H29.3~H29.12

※えちゃけなは平成29年3月開店。

5 花 き

(1) 活動の重点指導事項

- ア 主要な花き産地の活性化
(小ギク・切り花はぼたん・ストック)
- イ 新産地の育成 (フリージア)

(2) 活動の経過と実績

- ア 主要な花き産地の活性化

(ア) 小ギク

- a 定植から順調に生育し、梅雨時期もまとまった降雨があったため、草丈も確保でき、出荷も順調にされた。

イ) 切り花はぼたん

a 加賀

播種から生育は順調に進み、10月の台風の影響により一部のほ場では倒伏も懸念されたが、影響は微小であった。

出荷時期も気温が低下したため、発色も良く、品質・出荷量とも十分な対応ができた。

b 小松

徒長苗防止のため、JAと連携し育苗期から巡回をこまめに行い、特に新規や経験の浅い生産者を重点的に指導した。初期生育からコナガが多発し、県内でも広範囲に発生した。徹底防除を呼びかけてはいたが追いつかず、生育が抑制された圃場もあった。

また、追肥時期を早めるよう指導し、早期の草丈確保(特に初紅)を図った。着色始めはやや遅かったが、色戻りは昨年より目立たず、順調に出荷時期を迎えた。出荷実績は、新規生産者の加入と商品化率向上により、小松管内初の75,170本となった。



切り花はぼたん10月の生育状況

(ウ) ストック

- a 1カ所(初期生育が順調で早めに花芽分化)以外の全てで9月の高温と10月下旬からの天候不良により花芽分化及びその後の生育が遅れた。出荷は11月10日から始まったが、本格出荷は2月下旬になった。生育全体では開花が大幅に遅れ、年内の出荷量は例年に比べると少なかった。
- b 病害虫では、8~10月にかけてコナガが連続発生した。1~2月は大雪のため出荷中断となることもあった。積雪によるパイプハウスの被害も発生した。

イ 新産地の育成

(ア) フリージア

- a 加賀地区では市場出荷を促進するため、JAと協力し作付拡大の推進や新規生産者を募った結果、新たに生産者が1名加わった。能美・小松地区では水稲作業との競合により2戸が栽培縮小となった。
- b 出荷率向上に向けて促成作型では定植時の地温低下と草丈確保のために発雷までの保温管理を徹底した。季咲栽培の出荷時期を早めるため、9月中の定植

を呼びかけるとともに、共販出荷率を上げるため、単位面積あたりの植え付け球根数も少なくして検討した。

- c 新規栽培農家の掘り起こしのため作物担当やJA担い手担当と連携しリストアップ、掘り起こしを行った。栽培農家候補を対象に加賀市の圃場で見学会を行った。



フリージア圃場見学会

管内の花きの生産販売状況

品目	産地名	栽培面積 (ha)	農家数 (戸)	販売量 (千本)	販売金額 (千円)
砂丘地けいとう	小松能美	0.06	2	15.6	634.5
トルコギキョウ	小松能美	0.22	3	26.6	3,187.7
ストック	小松能美	0.90	7	194.9	12,056.7
小ぎく	加賀	0.27	13	33.1	1,306.0
切り花はばたん	小松能美	0.40	12	77.8	4,961.8
	加賀	0.20	15	41.1	2,582.0
ひまわり	小松能美	0.15	3	38.1	1,706.0
フリージア(H29産)	小松能美	0.34	10	25.4	1,165.5
	加賀	0.20	5	39.7	1,785.7